

元禄期大名：良将・善将・悪将・愚将

－「土芥寇讎記」－

横浜歴史研究会

長尾正和

1. 「土芥寇讎記」とは

1) はじめに

- ①「土芥寇讎記」（どかいこうしゅうぎ）は、元禄3年（1690）時点での全国243人の大名についての評価を記した書である。
- ・ 本書は作成目的、編纂者等々不明な点も多い。謎の史料という声もあり、あるいは、五代綱吉の時の幕府内部でのマル秘資料とも言われている。
- ②本資料の基礎的、かつ、まとまった研究には次の二つがある。
- ・ 「『土芥寇讎記』（翻刻本） 金井圓 1967・昭和42年新人物往来社」。
 - ・ 「『土芥寇讎記の基礎的研究』 一橋大学大学院・若尾政希助教授による研究チーム 2004年4月。
 - ・ 以下では、これらから多くを参照・引用しつつ、本史料の内容を明らかにする。



めの批評を加えている」。

現存が確認されているのは東京大学史料編纂所で所蔵の一部のみである。

- ② 和綴じの状況からこれが原本と推測される。
- ③ 史料としての評価は、「本文評」あるいは「謳歌評説」部分は、確立しているとは言えないが、各領地の「地方知行」の記載内容については史料価値として相当正確では、との評価がある。
- ④ 各大名についての記載項目は次のとおりで、共通であり、統一、かつ計画性をもって編纂されている。

姓・称号・本姓・諱 官位 紋
庚午（元禄三年）の年齢
室 父の姓・称号・諱・続柄嫡子 姓名 庚午の年齢 その他の直系家族
本国 生国 童名 家督 官歴 家伝（遠祖・近代の元祖・家系）
居城（江戸よりの里程 本知石高・・・分知又は立藩事情 米産・払米の良否・・・家中知行の形態・・・国役の有無・・・禽獣魚柴薪など特産の有無 家臣団の組成 家民の風俗 政道の寛嚴 土地柄の上中下・・・家老名
大名の性格・行跡（才智 文学 武道 武芸 人遣 仕置 男色女色 智愚 逸話 世説風評） （幼少の場合は父の性格・行跡）
謳歌評説（編者の批評）

2) 本書の概要

- ① 体裁は、「全43冊の和綴じの毛筆書きの記録であり、全国諸大名243人（全大名はこのとき250人）につき、その家系・略歴・居城・人柄などを摘録し、これに編者と思われる人物が、『謳歌評説』と称するまと

3) 書名の由来

- ・ 書名は「孟子」上の文章、「君の臣を視ること土芥の如ければ、則ち臣の君を視ること寇讎の如し。」から来ている。「これは儒学者孟子が齊の宣王に語った言葉で、君臣関係に

ついて君たるものの心得なくてはならない心的態度を論じたものである」。

- ・「土芥」は土、ごみあるいは、取るに足らないもの、「寇讎」はあだ、あるいは仇の意。要は君主が家臣を見下していれば、家臣は敵意を抱くことになる、とのたとえを述べたもの。」

4) 編纂思想

- ① 各大名についての評価を示した「本文評」および「謳歌評説」では、下記に挙げたもののほか多くの古典籍からの文を引用している。
 - ・「**四書五経**」 儒教の経書である『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書、および『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五経。戦国時代ではすでに武将たちの必読書。
 - ・「**武経七書**」 中国兵法書であり、政治論書でもある『孫子』『呉子』『尉繚子』『六韜』『三略』『司馬法』『李衛公問对』等。
 - ・「**貞観政要**」 唐王朝初代太宗が家臣に語った言行録。帝王学の教科書。
 - ・「**中国史**」 漢書、後漢書、唐書、三国志、史記等
 - ・「**古今和歌集**」「**徒然草**」「**吾妻鏡**」などの和書
 - ・ そのほか、相当広範囲の書を引用。
- ② これらは、いずれも徳川将軍家の学問の対象として積極的に取り入れられており、徳川将軍家の大名統治思想の基礎であり、かつ、大名についての評価基準であったことがわかる。

5) 編者はだれか

- ① 金井氏は編者不明説であるも、「幕府当局ないし将軍家に密着した一定階層の、現職ないし退職後の高官が、何人かの助手を使ってこの調査を行ったものであろう」、いずれにしる、「儒学を中心とする幅広い古典籍の知識や、個別大名ならびにかれらが取り巻かれて

いる環境等について相当の見識を持っていた人物であることは間違いない」とする。

- ② 一橋大チームでは編者の可能性として、**側用人牧野成貞、徳川御三家徳川光圀、儒学者林家、**等を挙げている。
- ③ 私見としては**編纂責任者は、「牧野成貞」と**するのが妥当ではないか。

- ・ かれはここでの評価対象大名に入っていない。本書に記載されていない大名は7名だが、大大名では成貞・下総関宿7万3千石のみ。



Wikipedia 所載
原典 笠間神社蔵

- ・ かれはその生涯綱吉の側近であり続けたがどのような功績があったかについては明らかではない。しかし、一貫して加増を続けている。
- ・ 1649・慶安2年かれが15歳のとき、まだ4歳であった綱吉にすでにお目見している。11歳年上である。26歳で綱吉側衆に、また綱吉が上野館林藩25万国を得たときに奏者番、知行3千石の家老となる。
- ・ 1680・延宝8年綱吉35歳が第5代将軍として就任したとき、初めての御側御用人に、かつ、常陸国内1.3万石の大名へ。その後も5.3万石、7.3万石となり、隠居後も嫡子成春が加増され8万石となる。
- ・ オランダ商館付医師ケンペルは1690・元禄3年およびその翌年の2回にわたり綱吉に謁見しているが、「(成貞は)将軍が若殿のころから監視役ないし後見人の地位にあったが、今は寵臣で練達であり、謁見のときには将軍の言葉を解してわれわれに伝達するにはうってつけ・・・と将軍は思っており、・・・。」とする。綱吉がいかにかれを頼っていたかが

伺える。

- ・本書では、綱吉が気に入らなかったといわれる大名に対しては、特出して厳しい評価をしている。
- ・編纂意図としては、綱吉による諸大名の統率の助けとなるものとして、個々の大名の治者として求められる姿を明らかにしようとしたのではないか。

④ **本書作成実行部隊**、すなわち、実際に筆を執ったのは**林家3代鳳岡**を中心とする林家チームか。

- ・林家は初代羅山、2代鷲峰が1643・寛永20年9月に「寛永諸家系図伝」を幕府に献上。林家には編纂のための全国の武家のデータや天下の書物が集積していたであろう。また、先代の羅山、鷲峰は幕府中枢にいた大名たちと交流し、記載対象大名の父、祖父等の情報も多かったであろう。

- ・ただし謳歌評説が、鷲峰、成貞いずれの筆になるかはさらに検討を要する。なお、金井氏は実際に浄書しているのは、その筆跡から見て3人としている。

⑤ 編纂責任者について、「**水戸光圀**である蓋然性は極めて高い」とする説もある。かれは「大日本史」編纂部隊として、1672年に「彰考館」を開設、また、貞享2年から資料探索が続けられた、等がその根拠である。しかし、本書での記述から見てあり得ないとする。

2. 各種「大名評価記」の存在

1) 江戸時代初期末における「大名評価記」

① 4代将軍家綱、5代綱吉の時代に次のような「大名評価記」が編纂されていたことが明らかにされている。ここでは「大名評判記」としているが、「大名評価記」と呼ぶ方が適切ではないか。（「『大名評判記』の基礎的研究」一橋大学大学院社会学研究科若尾政希助教授による研究チーム 2006年3月）

a. 「**武家諫忍記**」： 1658-61・万治年間の編纂と推測されている。現存する最も古い「大名評価記」である。全国で22部存在。ほとんどが水戸徳川家、加賀前田家、米沢上杉家等々の旧大大名家で所蔵されている。

b. 「**武家勸懲記**」： 1675・延宝3年時点での編纂。全国所蔵数24部。同じく旧大大名家所蔵。

c. 「**土芥冠讎記**」： 1690・元禄3年時点での編纂。東京大学史料編纂所所蔵の一部のみ。

d. 「**諫懲記後正**」： 1701・元禄14年時点での編纂。全国所蔵数5部。東京大学史料編纂所、および旧大大名家所蔵。

② 大名個々の評価の基準はこれらでは共通、かつ、一定している。また、これらに見られる引用書も「土芥冠讎記」と同様である。

③ 「土芥冠讎記」以外の史料はいずれも写本であり、一般的に出版されていたものではない。大大名家に存在するこれら写本は、それぞれの藩政に影響した可能性は大きいであろう。

④ 全国諸大名を網羅して評価している史料は、家綱、綱吉以外の時代のものは現在見つかっていない。

- ・類書には「**探索書**」寛永3年、「**諸将連続記**」元禄12年、「**武艦**」例年作成等々がある。ただし、個別大名の評価には触れていない。

2) 相互関係

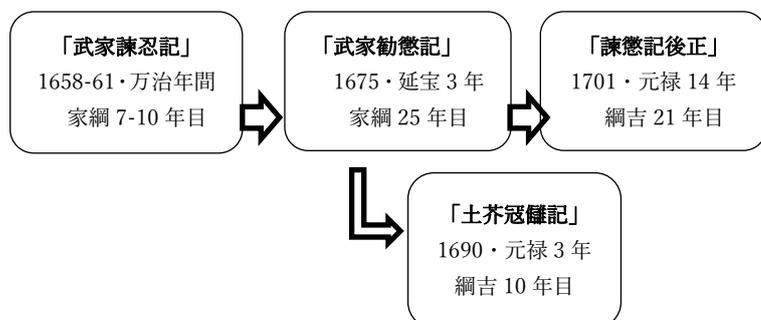
① これら4書には、次の相互関係がある。

- ・1675年編纂「**武家勸懲記**」は1658-61年編纂「**武家諫忍記**」を、あるいは1701年編纂「**諫懲記後正**」は「**武家勸懲記**」を、それぞれ相当程度継承し、時代に合わせ編集。

- ・1690年編纂「**土芥冠讎記**」は、「**武家勸懲記**」の記述も多く継承しているものの、「**諫懲記後正**」では、「**土芥冠讎記**」に書かれた謳歌詳説（まとめの評価）をほとんど参照していない。（一橋大「『土芥冠讎記』、『諫懲記後正』、評

者の思想に関する一考察－『武家諫懲記』の引用から」等)

- ・「土芥寇讎記」は既存の評判記を参照しつつ、独自の目線で、かつそれで完結した形で作られている。また、ほかの史料と違い出回った形跡がないのが特徴である。



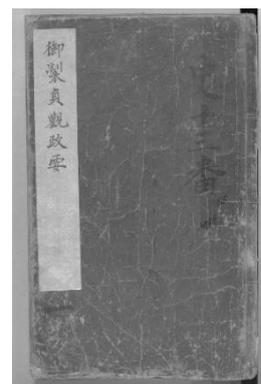
3. 徳川将軍家の統治思想

1) 徳川家康の学問と出版

- ① 各種大名評価記での個々の大名評価のための多くの引用書から、徳川将軍家の統治思想、政治思想が見えてくる。これらは家康による学問重視の姿勢から来ており、信長・秀吉等との決定的差とされる。
- ② 家康（松平竹千代）は8歳から19歳まで、今川義元の下で人質として過ごしたが、義元家臣でかれの師でもあった臨済宗禅僧の太原崇孚（雪斎）に預けられ、漢籍等について直接教育を受けている。
- ③ 家康は成人後も、一流の学者たちから多くを学んでいる。
 - ・ 1593・文禄2年には家康は肥前名護屋の陣中で、藤原惺窩から「貞観政要」の講義を、また、ほかの禅僧より「吾妻鑑」の講義も受ける。惺窩は相国寺禅僧で、近代儒学の祖とされる人物。
 - ・ 1597・慶長2年 家康は足利学校の庠主（校長）であった臨済宗の僧閑室元佶を伏見の徳川屋敷に招き、「詩経」の講義を受ける。翌年にも6度に渡り習っている。
 - ・ 1605・慶長10年、惺窩の弟子林羅山（道春信

勝）を儒学の師として雇い入れる。

- ④ 学問の対象は儒学、兵学、歴史、あるいは和書と広い範囲に及んだ。
 - ・ 家康の侍医の記録によれば、好きな読み物は「論語・中庸・史記・漢書・六韜・三略・貞観政要」。和本では延喜式、東鑑（吾妻鑑）その外色々であった。
 - ・ 家康は「馬上にて天下を取り、文を以て天下を治める」と述べたとされる。また、遺訓とされる「過ぎたるは猶及ばざるが如し」は「中庸」にある。
- ⑤ 家康は漢籍・和書を収集するとともに知識の普及のため出版にも力を入れた。
 - ・ 閑室元佶を伏見の圓光寺に招き学校の役割を持たせ、木版活字により1599慶長4年から11年にかけて、「貞観政要」、「吾妻鑑」、「武経七書」等計各7書を出版させた（伏見本）。
 - ・ 1607慶長12年 林羅山に命じ、初の銅版活字で「大蔵一覽」「郡書治要」を出版（駿河本）。
- ⑥ これらの取り組みに対して、「家康が取り組んだことは日本で最初の国家イデオロギーを確立する事への挑戦」とする見解がある。（WS「松岡正剛の千夜千書」）
- ⑦ 2代秀忠は1597・慶長2年6月18歳のとき、閑室元佶から「六韜」の講を受取る。
 - ・ 3代家光は嫡子4代家綱、4男5代綱吉等に儒学を厳しく教え込んだとされる。



「貞観政要」伏見版
WS市立米沢図書館所載

2) 親裁政治から文治政治へ

- ① 家康は学問を重視する一方で、武力と権威を背景に全国の支配を強化。以後秀忠（1632・

寛永9年没、54歳）、家光（1651・慶安4年没、48歳）の間はいずれも将軍がリーダーシップを持ち、直接意思決定していた親裁統治である。

- ・ただし、家光は34歳となった1637・寛永14年初めころから体調が思わしくない時期が続き1年ほど執務が出来なかった。このころから老中、あるいは合議による意思決定システム、幕府の官僚制度の構築が進むようになる。

- ② 4代家綱は1651・慶安4年4月11歳で就任、1680・延宝8年5月に没するまで30年弱將軍職を務めた。実際に政務を執り行ったのは家光時代からの老中松平信綱、阿部忠秋、あるいは後見人である叔父保科正之であった。
- ・家綱には、林羅山が「貞観政要」を和訳した「貞観政要諺解」を作成献上。家綱はその講義も受け、文章を覚え、将軍として正しく振舞うことを務めた。
 - ・家綱の時代に、家康以来の儒学・朱子学路線が現場に結びついたという。

- ③ 5代綱吉は、これを踏まえ儒学を中心とする思想の下での統治を明確にした。
- ・綱吉は將軍職就任後に林家第3代鳳岡を召して、自らも参加する経書討論会を月に2、3度開催。



徳川綱吉像
Wikipedia「徳川綱吉」より

- ・「綱吉は『孝経』『大学』の2書に慣熟し、注もあわせて誦んずることができた。朝夕には夜もすがら仮眠もしないで「孝経」を誦ることが常であった。」（福田千鶴「綱吉」）。
- ・1683・天和3年「武家諸法度」第一条では、それまでの将軍の下での「文武弓道の道、専ら相嗜むべきこと」との表現を、「文武忠孝

を励まし、礼儀を糺すべき事」に切り替えた。

- ・1691・元禄4年湯島に聖堂を創建、鳳岡を「聖堂学問所」（のちの昌平黌学問所）の責任者とした。
- ・また、この機に林家は僧籍から士分となり「大学守」の官位も与えられた。

4. 元禄期大名の評価

1) 評価の基準

- ① 各大名良否評価の基本は、「文武」を兼ね備えているか否かにある。
- ・「文武は主将の務」とする。さらに「文」が「武」に優越していなければならない。
 - ・「文」の基本は、儒教の基本理念である5常（徳）、すなわち仁・義・礼・智・信を学び、かつ、わきまえているか否か、である。
 - ・「文」優位であるも、一方で「武」は「主将の家業」とする。「武道」は領主が修養すべき「業」であり、これは戦争術を念頭にした兵学である。
 - ・剣術・弓術・馬術などの「武芸」は武士一般のもの。（一橋大「土芥冠讎記」における文武両道について－编者像の模索とその周辺－）

② 大名評価

	良	普通	悪	未	計	%
親藩	11	1	3	1	16	6.6
譜代	48	13	27	27	115	47.5
外様	55	10	25	21	111	45.9
計	114	24	55	49	242	
%	47.1	10.0	22.7	20.2		100

（一橋大「元禄期における文武両道について－『土芥冠讎記』の作者の視点から」）

2) 各大名評価

#72 浅野長矩 播磨赤穂 5.3万石 24歳

- ① 1675・延宝3年1月父没により、9歳で第3代藩主。1701・元禄14年3月「殿中刃傷事件」で切腹。享年35。
- ② 磯田道史氏「殿様の通信簿」では、「土芥冠

讎記は浅野家に関する**数少ない史料**のひとつ」また、「(本文では)・・・ただ女色にふけるの難のみを挙げているが、「女色」についてはどこまで事実か疑問。かれの側室の情報はほとんどない」としている。また、「次に家老の仕置も心もとない。若年の主君が色にふけるのを諫めないほどの「不忠の臣」の政道だから覚束ない。」と、家老が問題であると指摘。

- ③ 「**諫懲記後正**」は殿中刃傷事件の年に編集されており、事件を予見するような評価となっている。ここでの「愚評」では、「この将、文道なく智恵なく、気のはたばりなく、生得小気にして律儀なりと云えども、短慮なれば、**後々所行のほど覚束なしとなり**。されども長矩、淳直にして、行跡不義なく、奢らず、公勤を重んじ、世間の出会いよろしくせらるゝとならば、悪しきにあらず。」としている。

3 徳川光圀 水戸徳川 28万石 63歳

- ① 初代徳川頼房の3男。1661・寛文元年頼房死去により、34歳で相続、水戸徳川家第2代藩主。家康孫。
- ・ 1690・元禄3年 63歳で隠居。徳川一門最長老であった。
 - ・ 1700・元禄13年没。享年73。
- ② 評価： 良・名将。 文武行跡明らか。道を執行有り。家士勝手吉し。
- ・ 女色、酒宴、悪所の沙汰、出家学者を招きてその学習のほどを捜見給う等の問題はあるが容認出来る範囲とする。

5 松平昌親 越前福井 25万石 51歳

- ① 1674・延宝2年 光通39歳のあとを弟である昌親が5代相続。2年後隠居し、兄の子である綱政を6代とするも、その2年後綱政は強制隠居となり、昌親が7代として再任

される。

- ② 評価：悪将、奸謀、邪欲、吝嗇「**大愚の悪将**」。異様ともいふべき厳しさ。
- ・ 「土芥寇讎記」では「文武を学ばず」とする。ただし、のちの「諫懲記後正」では「文武両道を好む」とある。
 - ・ 1702・元禄15年綱吉の偏諱を得て吉品と改名。
- ③ 越前松平家宗家では、ここまで多々問題を起こしており、家中も不安定状態が続いた。
- ・ 初代秀康は、徳川将軍家2代秀忠の兄の家であり徳川家も常に高い関心を持っていた。
 - ・ 1607・慶長12年 秀康67万石没時、長男2代忠直が13歳で家督を継ぐ。
 - ・ 1612・慶長9年 越前騒動。幕府からの家老と結城家時代の家老との対立。家康自身が裁定。
 - ・ 1623・元和9年 忠直は29歳で**隠居**が命ぜられ、50万石に減封**改易**。弟忠昌が相続する。
 - ・ 1645・正保2年忠昌没。次男4代光通10歳が継ぐ。
 - ・ 1671・寛文11年光通妻**国姫(光長娘、母は毛利秀就娘)自害**。男子が生まれず、祖母であり忠直正妻であった秀忠・江の3女勝姫(高田殿)からの圧力を苦にしていたといわれる。
 - ・ 1674・延宝2年4代**光通**39歳自害。

9 前田綱紀 加賀金沢 120.5万石 48歳

- ① 1645・正保2年父3代光高30歳死去により3歳で相続。前田利家ひ孫。祖父2代利常が後見人。万治元年1658(16歳)10月利常の没後は保科正之が後見となる。
- ② 評価： 良将であったが、近年吝嗇、卑劣。文武 良。家士風俗優長、民間安穩。
- ・ 近年出頭人(注. 主君の寵を得て、権勢をふるっている者-大辞林)の悪影響あり。旧臣を評価。

・「「後正」では、「良将善将の誉れあるあるべき也」とする。

③ 正妻は保科正之娘。

- ・「岳父譲りの命君の資質」であり、徳川光圀、池田光政らと並び江戸前期の名君の一人とされる。家臣も新井白石は「加賀藩は天下の書府」と礼賛。
- ・「藩政に関しても、正之を模倣した感が否めない。」（歴読）との指摘もある。
- ・多芸多趣味 能楽はプロ級 加賀藩士たちも多趣味で書を好んで読む。

10 伊達綱村 奥州仙台 62万石 32歳

- ① 1660・万治3年7月、父で3代綱宗が遊興に耽っていたとの理由で就任2年で隠居が命ぜられたため、2歳で家督を継ぎ4代藩主。初代政宗のひ孫。



伊達綱村
Wikipedia 所載
原典：仙台市博物館蔵

- ・後見人は大叔父 伊達宗勝（政宗10男、一関藩主、3万石）、田村宗良（2代忠宗3男、岩沼藩主、3万石）など。
- ② 評価：「良将」。本文評「世俗評して云う、綱村文武之両道を専らと学び嗜まるる事、誠に主将之器と云うべし。」
- ③ 1671・寛文11年綱村13歳の年、伊達騒動が起きる。
 - ・大老酒井忠清邸で審理中、宗勝の奉行（家老）原田甲斐が、伊達（安芸）宗重（湧屋伊達家、2.2万石）を突如その場で斬殺した。これにより後見人の宗勝、宗良等は処分されたが、改易は免れ綱村は若年に付きを咎めなしとされた。

- ④ 1685・延宝3年、綱村17歳は初めて仙台に入国。自ら政務を執る。
- ・運河の開発、防風林の設置等の農業関連政策、儒学者を招いての藩士の編纂などの文化政策、寺院・神社の造営、鹽竈神社の保護などの宗教政策などの成果がある。
 - ・中興の名君であり、小型綱吉の感あり、とする説がある。

13 黒田綱政 筑前福岡 52.3万石 32歳

- ① 1688・元禄元年父3代光之の隠居により4代相続30歳。初代長政のひ孫。
- ② 評価：愚将、性質は吝嗇、民を貪る悪。国状は「武士の風俗は武勇、百姓困窮」。
- ・謳歌評は、父親は善政を行ったが、「兄を退いて家督とする」とは「目利きそこない」と批判。
 - ③ 2代祖父忠之は黒田騒動を起こしている。かれは22歳で相続、わがままで粗暴、派手を好む性格とされており、初代長政はそれを案じて筆頭家老の栗山大膳を後見人とする。しかし、自ら側近を別に集め、大膳を含め代々の重臣たちと対立した。
 - ・1632・寛永9年、大膳は忠之の政事を憂い、謀反の企てありとして家光に訴える。忠之は実質的に改易は免れ、このあとは旧重臣による合議制を取るようになったとされる。
 - ④ 父・光之は、1654・承応3年27歳で相続。厳しい儉約令を出して藩政改革に取り組み、武断よりも文治を好み、儒学者、貝原益軒を再び召抱え、『黒田家譜』などを編纂。
 - ・嫡男綱之は、1675・延宝3年性格粗暴、奔放、酒乱等ありとの理由で廃嫡。光之は61歳で引退し、3男綱政に家督を譲る。第2の黒田騒動とも言われる。
 - ⑤ 謳歌評では、綱政より嫡男綱之の方が人物はすぐれていたとの判断。父光之は善政は行っ

たが、「兄を退て家督とするは目利きそこないのこと」と綱政をかわいがり後嗣としたことを批判する。

⑥ 綱政のミイラ葬

- ・かれは1711・正徳元年53歳で没したが、1950・昭和25年 福岡市・黒田家墓所崇福寺改築時、かれがミイラの形で葬られていたことが判明。大量のヒ素が検出され、毒殺であった。
- ・当時兄綱之の廃嫡に反対する有力家臣たちがいたこともあり、家老隅田主膳が病気と称し2か月間その死を秘匿したという。し烈な相続争いがあったか。



WS「西日本フォトライブラリー」所載

い限り容認されていた。

- ・「色を好むことは聖人ではないものにとっては当然のこと」であった。ただし、「害をなすか否か」、「家を相続させる」、「政事に影響するか」などが問われた。
 - ・色欲により酷評された大名は32名、容認されたのは22名である。（一橋大「『土芥寇讎記』における男色・女色・少年愛」）
 - ・20万石以上の大名で女色を強く批判されているのは佐竹義処のみ。
- #### ④ 末期養子、すなわち、大名の死去に当たって養子を迎えることは禁じられていたが、家綱就任の1651慶安4年から随時緩和される。
- ・家康から家光の50年間に世子断絶による改易は64家に達したが、家綱・綱吉の58年間では21家である。

以上

3) #15 毛利吉哉 長門萩藩 36.94万石 18歳

- #### ① 1682・天和2年、父2代綱広隠居により15歳で3代藩主へ。初代秀哉の孫。
- ・1694・元禄7年27歳で急死。母は越前福井家松平忠昌の娘。
- #### ② 評価：大名に似合わず、利徳を考ふる、文武両道は偽に似る、性質は悪で利発過ぎたる、国状は家中風俗奢りて無礼。
- #### ③ 検地、治水工事、寺院建立などをするが財政悪化を招く。

4) #23 佐竹義処(よしずみ、よしより/金井) 出羽秋田(久保田) 25.58万石 54歳

- #### ① 1672・寛文12年父・義隆の死去により家督を相続し、3代藩主。
- ・正妻は出雲松平直政(越前松平家分家初代)娘。
- #### ② 評価：悪、奸智の将。女色、妾多きことを批判。
- #### ③ 女色についてはこの時代藩政に乱れを生じな

参考資料

- ・「土芥寇讎記」金井圓 1967年11月 新人物往来社
- ・「『土芥寇讎記』の基礎的研究」一橋大学大学院社会学研究科・研究代表者若尾政希助教授による研究チーム 2004年4月
- ・「『大名評判記』の基礎的研究」同上 2006年3月
- ・「徳川綱吉」福田千鶴 2010年7月 山川出版社
- ・「徳川将軍15代」山本博文 2011年10月 小学館
- ・「戦国大名と読書」小和田哲男 2014年2月 柏書房
- ・「歴史読本・名藩主列伝」新人物往来社 2012年3月
- ・「江戸大名廃絶物語」新人物往来社 2009年8月
- ・WS 関連 Wikipedia、「国立国会図書館」等